

作家訪問

赤川次郎先生

Q 1 『角に建った家』に出てくる少女にモデルはいますか？

A モデルはほとんど考えていないです。もつと言えば登場人物の詳しい設定もしていません。読者に想像してほしいからです。

Q 2 「三毛猫ホームズ」シリーズはどのようにして生まれたのですか？

A 家で飼っていた三毛猫が亡くなったので自分の書く話に入れてあげようと思ったからです。

Q 3 「夫は泥棒、妻は刑事」シリーズや、「マザコン刑事」シリーズのようなユニークな組み合わせはどんな風に思いつかれたのですか？

A 出版社の方の案が面白そうだと思ったからです。

Q 4 小説はどんな時、どこで書くのでしょうか？ また、どのような時にアイデアが浮かぶのですか？

A ミステリのトリックはどうやって思いつくのですか？
A 自宅の仕事場です。昔はカフェなどどこでもできたのですが、もう体力がないのでできません。トリックは元々

アイデアがある訳ではなく、原稿用紙を前にすると浮かびます。

Q 5 ミステリ作品の伏線はどのように考えて構成しているのですか？ 最初から決めているのですか？

A 全く考えません。流れを大事にしたのでそのときに考えます。後から「あれを使おう」と思っただけです。

Q 6 情景描写するときには、想像して書いているのですか？ それともリサーチしたものを元に書いているのですか？

A リサーチは全くしません。だから想像して書きます。読者に想像してもらいたいので詳しくは書きません。舞台となる地方も決めないで、登場人物が皆標準語なのはそのためです。

Q 7 作家を志したのはいつ頃ですか？
A 作家を志したことは一回もありません。作家になるために好きでもない本を書くことは嫌だからです。好きな本、書きたい本を書こうと心に決めています。

Q 8 物語の主人公が女性である場合など、ご自身と違う立場の視点から執筆する際に気をつけていることはありますか？

A ミステリはどうしても殺人を取り扱うことが多いので、話が暗くならないように女の子を登場させています。その方が書いていて楽しいという部分も

あります。

Q 9 本を書くために重要な点は？

A 書き続けることです。流行だから書くことはしないように、無理はせず、自分が読みたいと思えることを書くようにしています。無理をするとそれは読者に伝わるからです。

Q 10 今後執筆される予定の新たなジャンルはありますか？ 演劇の脚本はいかがでしょうか？（もし、すでに執筆済みでしたら失礼をお許しください。）

A 先の作品のことは考えていません。最近ではシリーズものが多くて、シリーズでない新作を書く余力が残っていません。書くとしたら、いろいろ書きたいですね。戯曲は書いたことがあります。『吸血鬼』に3編の台本を書きました。わざと公演できないように書いたため、舞台化はされていません。また、「モノクローム」という、光と闇を逆にする技法が舞台に使われていて、例えば明るい気持ちのシーンは暗転にし、暗い気持ちで先が見えないときは明転するようになっています。

Q 11 どんな学校生活でしたか？

A 勉強ができませんでした。公立の小学校に通っていて受験を考えていなかったのですが、6年生のときの、転校先である中野区立桃園第三小学校の担任の先生が受験させる事が大好きな人で、しかも最初のテストで50人中3番目になってしまい、先生に勧められ

て、中高一貫校の桐朋学園を受験しました。受験科目は国算だったのですが、理数系が苦手だったのでつきり落ちたと思って、合格発表は自分では見に行かずに母親に行ってもらったところ、まさかの合格でした。

学費のかかる中学だったので、授業料を工面するのが大変で、明日払わなければ退学しなければいけない程でした。学校は自分にとって、勉強よりも友達に会いに行くための場所でした。

Q 12 高校時代に体験してよかったと思うこと、または体験しておけばよかったと思うことがありましたら教えてください。

A すべて体験していて良かったです。クラブ等をしておらず、映画や本を読むなど、好きなことばかりできたのが良かったです。

Q 13 作家以外で芸術活動をするとしたら、どんなことをなさりたいですか？

A 他は何もできません。だから小さい頃は、文章を書いているときが自分を取り戻せる時間でした。

Q 14 最近の趣味、面白いと感じられた本、映画等がありますか？

A オペラ、芝居のほか、映画は特に古いヨーロッパのものが大好きです。実は映画監督になりましたかったりもしたんです。最近読んだおすすしたい本は、『紛争地の看護師』（白川優子著）です。機会があったら、読んでみてください。

Q 15 最近若い人が好むような音楽を聴かれることはありますか？ 聴く場合はどんな音楽がお好きですか？

A わかりません。最近の音楽はどれも同じに聞こえます。

Q 16 今の高校生について感じていること、気になる点がありましたら教えてください。

A 高校生は大人になる間口(入口のこと)なので、背伸びして勉強すると良いと思います。高校生ならどんな本を読んでも構わないです。だから、視野を広げるべきです。私が中高生の時は娯楽の本を読んだら新書を読む、というルールを作って交互に読んでいました。今、世界で起きていることは絶対に自分に繋がっているということを知ることがあります。

ネットのニュースを読んで分かった気になつてはなりません。以前 Wikipedia で自分のページを見てみたら「高校を中退」「妻と高校時代に出会った(注・男子校なので有り得ない)」等とでたらめが書かれており、ネットは信用ならないと思うようになりました。もしもネットを利用して調べたのであれば二重三重に調べ、本を読む手間を惜しまずに、本を使うべきです。

高校生のうちは単に楽しいことだけ追いかけてしまいがちですが、それ以外のことに目を向けると良いです。国際化が進む中、世界から見て日本はどう見えているのかを今のうちに考えておきましょう。テレビで放送されている世界のドキュメンタリー番組は、

外国からの視点で映されていて面白い上にためになります。

Q 17 ご自身の著作の内容を全て覚えていらつしやるのですか？ 特に高校生に読んでほしいおすすめの商品はどれですか？ 最も印象深い作品、思い出の作品は？

A 全部覚えている自信はありません。しかし、少し読めば思い出せると思います。おすすめは、今の社会に対する発言を意識して書いた短編の「悪夢の果て」と「教室の正義」です。思い出の本はやはり「三毛猫ホームズ」です。あとは映画化もされた『ふたり』です。

Q 18 『セーラー服と機関銃』の二〇一六年映画化作品はご覧になりましたか？ 以前の作品に比べて「変わったな」と思うところはありますか？

A 二〇一六年版は続編が原作になっているためなんとも言えません。しかし原作とあまりにも違っていて・・・。前作の設定を大切にしたい欲しかったのですが、脚本を読んだらかなり違っていました。タイトルが「卒業」となっているのに、最初の脚本では卒業できずに終わることになっていて・・・、橋本環奈ちゃんは頑張っていましたね。

Q 19 人生の大先輩として、これからの目標にされていることがありましたら教えてください。また、成高生に向けてアドバイスをありましたら是非お願いいたします。

A 今の年代が一番好きなことができる時です。今のうちにできるだけ「いいもの」に触れて、たくさん感動してほしい。親のスネをかじってでも。感動することと熱狂することは違います。皆で熱狂することもステキだけれど、「感動した体験」は人を成長させるものだから。

Q 20 なぜ今回、取材を受けてくださったのですか？

A 学生さんの取材はなるべく受けるようにしています。物を作っている人に出会う機会は良いことだし、僕と出会うことで本を読むキッカケになればいいなと思います。

Q 21 「三毛猫ホームズ」の原作とドラマの設定がかなり違っているようなのですが、その経緯をご存じでしたら教えてください。

A 猫をドラマで使うのは撮影が大変です。黒猫であれば何匹かで撮ることができますが、三毛猫は一匹一匹模様が違うのでそれができません。苦肉の策でマツコデラックスを出演させたのだと思います。原作にはいない片山(主人公)の兄が出てくるのは、相葉(雅紀)くんが忙しかつたためだと思います。「三毛猫ホームズ」は過去にも何回か映像化されましたが相葉くんが一番似合っているのではないのでしょうか。数回お会いしましたが真面目で礼儀正しい人でした。

Q 22 先生の作品が映像化される際に、先生はどのくらい関わっていらつしやるのですか？

A 脚本を読んでも言えることはありません。作り手は原作者に口出しされることを嫌うのだと思います。滝沢(秀明)くん主演の「鼠、江戸を疾る」は、一年目は原作に忠実でした。しかし二年目は原作と全く関係の無い話で・・・。何十年ぶりにプロデューサーと大喧嘩しました。映像化した時に読者に「映像化しなければ良かった」と思わせてしまうと申し訳ないですし、そう思わせたくなありません。

Q 23 たくさんの作品を書いていらつしやうて、登場人物の設定が混ざってしまうことはありませんか？

A プロだからそれはありません。それが起きてしまったらボケた時です。

(記録まとめ 2 年 KA & H)

【感想】

◆今回訪問させて頂いたのは赤川次郎先生です。まさか小学生の頃から夢中で読んでいた「三毛猫ホームズ」を書かれた先生に本当にお会い出来るとは思っていなかったもので図書委員のお知らせ（作家訪問実現）を聞いた時、とても驚きました。当日は自分が質問する担当だったのでインタビューが終わるまでずっと緊張していました。一番印象に残っているのは「小説を書くことを楽しみながら書く」という言葉です。先生の小説は書くことの楽しさで出来ていると感じたことです。小説を通して先生の楽しみを少しでも共有できて嬉しいです。“楽しい”という気持ちは人生の上でとても大切な力になるんだなあ、と思いました。（1年A）

◆今回、赤川次郎先生のお話をうかがって、もともと作家志望ではなかったことに驚きました。赤川先生がこれまでに数々の有名作品を生み出していらっしやるので、小さいころから作家を志望していたものと思っていたからです。しかし、偶然物語を書く機会があり、それから書くようになったと聞き、人生は何があるかわからない、と思いました。私も今の状況だけで将来を決めるのではなく、色々なものに目を向けて自分の夢を見つけないかと思いました。（1年S）

◆私は小学生の頃から赤川先生の本が大好きで、朝読書の時間によく読んでいました。赤川先生の作品で私が思う面白ところは、登場人物の組み合わせと、ストーリーと登場人物の組み合わせです。よくこんなに面白い組み合わせが出てくるなあと思っていて、こんな組み合わせを思いつく人は、面白い方なのだろうなあと思像していました。ストーリーももちろん面白いのですが、インタビューにもある通り、赤川先生のお話面白かったです。

取材した中で、赤川先生はやはりすごい方なのだな、と実感することばかりでした。ご自身では「たまたま」「そんな気はなくて」といった謙遜をされていましたが、そのような対応を出来るところも実績に繋がっているのだな、と感じました。
最後に仰っていた「感動」と「熱狂」という言葉は違うということ、感動するものにいつぱい触れて欲しいという言葉に感動しました。（1年I）

◆今回はお忙しい中、赤川次郎先生に取材させて頂きました。貴重な時間がありがとうございました。私は中学二年生の頃、学校の図書室で『三毛猫ホームズの推理』と出会いました。きっかけは、タイトルを聞いたことがあったからというとても単純な理由でしたが、読んでみると私の好みにぴったりですぐにはまりました。当時は一週間に一冊は必ず「三毛猫ホームズの推理」シリーズを読んでいました。だから今回の作家さんが赤川先生だとわかった瞬間飛び上がりそうになるくらい喜びました。当日、赤川先生のお姿を見た時「うわあ！本物だ！どうしよう！」と心の中で叫び、平静を装うことに必死でした。あの時の私は取材に来た図書委員というよりただのファンだったと思います。時間が経つにつれ徐々に落ち着いてきて、何とか司会を務めることができました。インタビューでは赤川先生の色々なお話をうかがえました。内容自体は記事にあるので書きませんが、一番驚いたことだけ書きます。それは、読者に想像して読んでほしいので、人物についての設定や場所などは具体的に書いていないということ。確かに思い返してみるとはつきりと書かれていない分、想像することで楽しめていました。先生の狙い通りだと思いました。この様に貴重な体験ができて、私は幸せ者です。赤川先生を始め、担当編集者さん、引率して下さった先生方に感謝したいです。

す。あと何回参加できるか分かりませんが、次回も頑張ります。（2年H）
◆私はこれまでに2回、作家訪問に参加してきましたが、今回が初めて校外で行ったことのないようなホテルのロビーで、若干気後れしてしまいました。が赤川先生のゆったりとした雰囲気、場が和み、無事にインタビューを進めることができました。

今回のインタビューを通して、印象に残ったことは二つあります。一つ目は、赤川先生が最初から作家を目指していたのではなく、コンプレックスや受験から逃れる心の拠り所として小説を書いていたということです。そこから偶然にも作家になってしまったというのは、進路をしつかり決めるように言われている私たちにとって新鮮で、マイペースに自分の可能性を広げていくことも大切だと教わりました。

一つ目は、自分を成長させてくれるものとして高校生のうちに感動する体験をしておくべきだと仰っていたことです。私は普段の生活の中でどうすれば感動できるだろう、と考えたとき、身近な「本」という存在は大きいのではないかと改めて感じました。

この作家訪問を通して、さらに本について興味が増し、これからたくさん本を読みたいと感じました。最後に、このような貴重な体験を与えてくださった先生方、そして赤川先生、本当にありがとうございました。（2年KA）

◆初めて作家さんに会うという体験をさせていただきました。私は、心に残った先生がおっしゃった言葉について思ったことを書きたいと思います。

まず、先生が出した六百冊以上の本全てが、書きたくて書いた、つまり書いて後悔するような本はなかった、ということ。普通、作家になりたい場合は売れそうな題材、流行しているストーリーを考えて書いてしまっている。しかし、先生は流行に流されて好きでもない本をつくることはしたくないから作家になりたくなかったそうです。それは何よりも本を書くことが好きという気持ちがあるからこそできたことだと思います。流行に流されやすい私たちの時代、流行を全く考えずに本を書くことは私にとって輝いて見えませんでした。

また、「感動と熱狂は違う。若いうちに感動を経験しておきなさい。」という言葉です。そこで辞書で両方の意味を調べてみました。ライブに熱狂する、勝利に熱狂したファンなど、「熱狂」はたくさんの人に囲まれて興奮した状態。「感動」は一人で心につよく感銘をうけることでした。熱狂することは一時的なものです。感動は大人になってからも残る大きな私たちの糧になり、自分を知るきっかけになることなのだと思います。SNSで流行が瞬時に分かるこの世界の中で自分が何に感動するのか（熱狂とは違う）を知る必要が私たちにはあるのではないのでしょうか。とても価値ある内容をお話ししていただき、良い経験になりました。（2年KT）

◆今回の作家訪問を通して、学んだことや興味深かったことはたくさんありますが、中でも登場人物のモデルについてのお話と、先生ご自身のお話が印象に残りました。

私は今まで登場人物の情報が明確に書かれている本ばかり読んでいました。それは、書かれているままに受け取ることが出来るので手軽に読めました。しかし、読者に想像してもらいたいから詳しくは書かない、という赤川先生の考え方を聞いて、自分で登場人物を想像しながら読むことも、本を楽しむ方法のひとつなのだと感じました。

先生ご自身の「小説が好きで、小説を書くことしか能力がなかったから小説家になり、自分でも楽しんで書くことが出来る」というお話を受けて、自分の将来に対する考えが変わりました。自分の好きなことを仕事にしたら、いつか壁に当たったり、他人と比べられたりして嫌いになるかもしれないという理由で好きではない仕事に就こうと考えていましたが、好きだからこそ頑張れるものなのかな、と視野が広がりました。

今回の作家訪問で新しい発見や考え方を見つけられたので、参加できて楽しかったです。（2年T）

◆今回の作家訪問は長い間待ってから本当に突然開催が決まり、私は実現すると思っていまませんでした。3年なので参加は迷いましたが、母が赤川先生の大ファンでもあり、母に説得され、参加しました。先生の本はもちろん沢山読んでいましたし、どれだけ偉大な作家さんであるかも存じ上げていました。今になってみれば、人生の中で大きな経験のひとつになったと思います。

私達はホテルのラウンジでお話を聞かせていただきましたが、雰囲気は豪華で、みんないつも以上に緊張していたと思います。外国の人も沢山いて、生演奏もあって、赤川先生はすごい方だなと改めて思いました。先生はこの会をなぜ引き受けてくださったのかという質問に、ご自分が意外と普通の人だということを知ってもらいたいというようにおっしゃっていました。お会いする前と印象は変わり、とても優しく、お孫さんと遊んでそうだなと思いました。赤川先生は出版本が六百冊を超えていらつしやいますが、そのアイデアはどこからという質問では、伏線の後付けすることや、主人公のことをあまり詳しく書いていないというようにおっしゃっていました。家に帰りその話を母とすると、確かに、と嬉しそうに話してくれました。今回の機会は一生に一度しかないことです。行ったら体験できないことです。行ってよかった。私は質問係ではなかったのですが、あまりお話できなかったけれどサインを頂いた時に『ふたり』のお話ができ、よかったです。（3年T）

赤川次郎氏プロフィール

一九四八年、福岡生まれ。桐朋高校卒。一九七六年、「幽霊列車」でオール讀物推理小説新人賞を受賞。「三毛猫ホームズ」シリーズなどユーモア・ミステリーの他、サスペンス小説、恋愛小説まで幅広く活躍。二〇一六（平成二八）年、『東京零年』で吉川英治文学賞を受賞。『セーラー服と機関銃』『ふたり』『三姉妹探偵団』『盗みは人のためならず』『鼠、江戸を疾る』『三毛猫ホームズの遠眼鏡』など著書多数。

日程 平成30年11月1日（木）

午後五時～六時

場所 都内某ホテル

参加者 図書委員1年～3年 計8名、
委員会顧問2名（主任教諭、司書各1名）、国語科教諭1名